

島嶼共生系学際研究環

<http://www.comp.tmu.ac.jp/island/>

可知直毅・沼田真也(首都大学東京)

島嶼共生系学際研究環は、「島をモデルにした人と自然の共生のあり方（島嶼共生系）」に関心をもつ研究者の集まりです。空間的に限られた生態系の中で、人と自然が持続的に共生するための文化的、社会経済的、自然的条件を、島嶼をモデルとして実証的に研究する新学術領域の確立をめざして、首都大学東京の支援によりワークショップなどを開催しています。

なぜ「島」か

「島」は周りを海に囲まれ、大陸から隔離されているため、大陸とは異なる独自の生態系や文化が育まれています。また、島は面積が限られるため、その生態系は環境変化に対して脆弱であり、社会構造にも偏りがみられます。そのため、島は自然科学者にとっては、生物進化の実験場であるとともに、環境変化に対する生態系影響に関する仮説を検証する野外実験場であり、また人文社会学者にとっては、異文化の接触による新たな文化の形成やその歴史的変遷を実証的に研究できるフィールドです。

ミッション

東京都には、伊豆諸島から小笠原諸島まで1000 km にわたって海洋に点在する島嶼群があります。これらの島々は、それぞれ特徴的な自然と独特な歴史・文化を育んできました。首都大学東京では、これらの島をフィールドとして、人文・社会系から、理学系、工学系、健康福祉系まで多様な分野の研究が展開されています。本研究環のミッションは、これらの島嶼研究を学際的に融合し、学外・海外を交えた共同研究の提案や情報交換を活性化するための研究ネットワークの構築を通して、「島嶼共生系」とその持続可能性に関する新学術領域を確立することです。

活動実績

本研究環では、2009年度に伊豆大島および首都大学東京にて2回のワークショップを開催しました。ワークショップには、学内外の研究者や地元NPO、自治体の関係者などが参加しました（表1）。

第1回ワークショップ（2009.10.10 伊豆大島）

第一部 問題提起（湯本貴和）

- ・島の豊かさや貧しさ
- ・島の多様性と固有性
- ・環境の世紀における島の意味



図1. 第1回ワークショップの様子

第二部 ブレインストーミングと課題整理

- ・明確な共通テーマ：Quality of Life（環境負荷が少なくても豊かな生活）
- ・空間情報や時間情報を統合し蓄積するツールの開発
- ・「人と自然」、「人と人」、「人とモノ」、「人と仕組み」全てをカバーする組織づくり
- ・研究成果の地元還元とフィードバック
- ・持続的な島嶼共生系を島自身が運営していくための「地域力」

第2回ワークショップ（2010.3.14 首都大学東京）



図2. 第2回ワークショップの様子

第一部 問題提起

- ・地域を生かす研究開発：
小笠原にサイエンスショップ*を（春日匠）
- ・きれい事では済まない島における人と自然の共生：
ペットのネコが希少動物の天敵にもなりうる小笠原でのとりくみ（鈴木創）

* 科学者が市民社会の要求をベースとした研究・開発を行うことを促進するためのしくみ

第二部 ブレインストーミングと課題整理

- ・住民参加あり方（住民と研究者のインターフェイスになる人材・組織）
- ・合意形成のしくみ（行政、住民、研究者のビジョンの共有）
- ・国際的なネットワークづくり

表1: 島嶼共生系学際研究環 ワークショップ出席者

	氏名	所属
学外	湯本貴和	総合地球環境学研究所・教授
	吉川泰弘	東京大学大学院農業生命科学研究科・教授
	手塚賢至	ヤクタネゴヨウを守る会・代表
	長嶋俊介	鹿児島大学多島圏研究センター・教授
	伊藤秀三	長崎大学・名誉教授/日本ガラパゴスの会・会長
	山上博信	日本島嶼学会・理事
	加藤明	(株)計画技術研究所・研究員
	鈴木 創	NPO小笠原自然文化研究所・副理事長
	春日 匠	大阪大学コミュニケーションデザインセンター・特任助教
	学内	ダニエル ロング
菅又昌実		人間健康科学研究科・教授（公衆衛生学）
村上哲明		牧野標本館・教授（植物系統分類学）
可知直毅		生命科学専攻・教授（植物生態学）
黒川 信		生命科学専攻・准教授（海洋生物学）
沼田真也		自然文化ツーリズムコース・准教授（植物生態学）
福士政広		健康福祉学部放射線学科・教授（放射線科学）
高桑史子		人文科学研究科・教授（社会人類学）
川原 晋		自然文化ツーリズムコース・准教授（地域デザイン）
事務局	酒井享平	社会科学部・教授（独占禁止法）
	坂本尚子	理工学研究科・リサーチアシスタント
	近藤日名子	〃

科学への参加(サイエンスショップ*)
Public participations of science

どのような社会体制を求めらるかを議論する
Public engagement of science

自分の生活と科学を関連づける
Public awareness of science

科学の知識を理解する
Public understanding of science

図3. 科学教育の階層構造（春日匠 原図を改変）

お知らせ

本研究環では、2010年度（2月）に島嶼共生系学際研究環 国際ワークショップ開催を計画中です。皆様のご提案を歓迎いたします。開催の日時や内容は、島嶼共生系学際研究環のホームページ（<http://www.comp.tmu.ac.jp/island/>）にて、随時ご案内します。また、本研究環の2009年度の詳細な活動報告書は、日本島嶼学会年報 第12号に記載予定です。